

眼 科 学

1 構 成 員

	平成15年3月31日現在
教授	1人
助教授	1人
講師（うち病院籍）	1人（1人）
助手（うち病院籍）	5人（2人）
医員	3人
研修医	3人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	1人（0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技官（教務職員を含む）	1人
その他（技術補佐員等）	2人
合 計	18人

2 教官の異動状況

- 堀田 喜裕（教授）（期間中現職）
 加藤 勝（助教授）（～H14. 6. 30 辞職）
 佐藤 美保（助教授）（H14. 7. 1～現職）
 中神 哲司（講師）（期間中現職）
 邱 彗（助手）（期間中現職）
 小出 健郎（助手）（期間中現職）
 浅井 竜彦（助手）（期間中現職，H15. 2. 1以降休職）
 朝岡 亮（助手）（～H14. 12. 31 浜松医科大学医員，H15. 1. 1～現職）
 野寄 清美（助手）（期間中現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成14年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	13編（4編）
そのインパクトファクターの合計	16.41
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	3編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	7編（7編）
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4) 著書数（うち邦文のもの）	4編（4編）

(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Qiu H, Fujiwara E, Liu M, Lam BL, Hamasaki DI (2002) Evidence that a-wave latency of the electroretinogram is determined solely by photoreceptors. *Jpn J Ophthalmol* 46 (4) 426-432.
2. Sato M, Terasaki H, Amano E, Okamoto Y, Miyake Y (2002) Ultrasound biomicroscopic findings in Hallerman-Streiff syndrome. *Jpn J Ophthalmol* 46 (4) 451-454.
3. 須網政浩, 加藤 勝, 堀田喜裕 (2002) 不顕性感染を認めた流行性角結膜炎の院内感染. *臨眼* 56 (4) 507-510.
4. 野寄清美, 町田拓幸, 丸山友香, 西村香澄, 佐藤美保 (2002) 副鼻腔手術後の内直筋断裂に Hummelsheim法を行った2例. *眼臨* 96 (4) 448-451.
5. 松永寛美, 川野敏夫, 加藤 勝, 堀田喜裕, 高橋邦昌 (2002) 脈絡膜骨腫2例のフルオレセインおよびインドシアニングリーン蛍光眼底造影所見. 56 (5) 857-862.

インパクトファクターの小計 [1.204]

B. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. Shimizu-Okabe C, Yokokura M, Okabe A, Ikeda M, Sato K, Kilb W, Luhmann HJ, Fukuda A (2002) Layer-specific expression of Cl^- transporters and differential $[Cl^-]_i$ in newborn rat cortex. *Neuroreport* 13 (18) 2433-2437.
2. Toyoda H, Ohno K, Yamada J, Ikeda M, Okabe A, Sato K, Hashimoto K, Fukuda A (2003) Induction of NMDA and GABA_A receptor-mediated Ca^{2+} oscillations with KCC2 mRNA downregulation in injured facial motoneurons. *J Neurophysiol* 89 (3) 1353-1362.

インパクトファクターの小計 [5.891]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. Nakamura M, Hotta Y, Piao C-H, Kondo M, Terasaki H, Miyake Y (2002) Enhanced S-cone syndrome with subfoveal neovascularization. *Am J Ophthalmol* 133 (4) 575-577.
2. Kilb W, Ikeda M, Uchida K, Okabe A, Fukuda A, Luhmann HJ (2002) Depolarizing glycine responses in Cajal-Retzius cells of neonatal rat cerebral cortex. *Neuroscience* 112 (2) 299-307.
3. Fujiwara E, Qiu H, Liu M, Lam BL, Parel J-M, Inana G, Hamasaki DI (2002) Reliability and significance of measurements of a-wave latency in rats. *Jpn J Ophthalmol* 46 (4) 419-425.
4. Hamasaki DI, Liu M, Qiu H, Fujiwara E, Lam BL (2002) The a-wave latency in control subjects and patients with retinal diseases. *Jpn J Ophthalmol* 46: 433-442.
5. Hirai T, Ito Y, Arai M, Ota Y, Kojima T, Sato M, Miyake Y (2002) Loss of stereopsis with optic chiasmal lesions and stereoscopic tests as a differential test. *Ophthalmology* 109 (9) 1692-1702.
6. 平野耕治, 中村 誠, 山本憲明, 堀田喜裕 (2002) 愛知県の格子状角膜ジストロフィ患者の地域特性: *TGFBI* 遺伝子変異の検討. *日眼会誌* 106 (6) 352-359.

インパクトファクターの小計 [9.317]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Sato M, Amano E (2003) Clinical findings and surgical results of true and masquerading congenital superior oblique palsy. [de Faber JT eds. Progress in strabismology. (Transactions of 9th Meetings of the International Strabismological Association) 211-214] Swets & Zeitlinger, Lisse.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Yagasaki T, Sato M, Hotta Y (2003) Primary monofixation syndrome in discordant monozygotic twins with strabismus. [de Faber JT eds. Progress in strabismology. (Transactions of 9th Meetings of the International Strabismological Association) 109-112] Swets & Zeitlinger, Lisse.
2. Hirai T, Sato M, Ukai K, Piao C-H, Terasaki H, Miyake Y (2003) Aniseikonia measured by hess chart and new aniseikonia tests. [de Faber JT eds. Progress in strabismology. (Transactions of 9th Meetings of the International Strabismological Association) 197-200] Swets & Zeitlinger, Lisse.

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 佐藤美保 (2002) 調節を配慮した眼鏡処方－斜視の眼鏡処方－. 視覚の科学 23 (1): 2-6.
2. 佐藤美保 (2002) やさしい目できびしい目で 私の宝物. 臨眼 56 (8): 1367.
3. 佐藤美保 (2002) 斜視の原因と遺伝. あたらしい眼科 19 (12): 1535-1542.
4. 川野敏夫, 堀田喜裕 (2002) 網膜ジストロフィのDNA診断と遺伝相談. 眼紀 53 (7): 595-600.
5. 彦谷明子 (2002) 研修医日記. 眼科 44 (8): 1113-1114.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 三宅養三, 寺崎浩子, 平野耕治, 佐藤美保, 中村 誠, 嶋津和弘, 堀尾直市, 近藤峰生, 近藤永子, 鈴木 聡, 伊藤逸毅, 谷川篤宏, 加地 秀, 朴 昌華, 平井淑江, 岡本洋子, 森 雅子, 鈴木俊光, 高桑英夫, 空野久美子, 高井佳子, 山本英津子, 堀 健二, 倉知 隆, 丹羽 敬, 伊藤 正, 浅見 哲, 上野真治, 丹羽英康, 西口康二, 石川浩平, 天野恵美, 堀口正之, 堀田喜裕, 森 磁夫, 片山直美, 川瀬芳克, 神田孝子, 塩瀬芳彦 (2002) 新しい疾患概念の確立－先天停止性夜盲の完全型と不全型－. 日眼会誌 106 (12) 737-756

2. 金井 淳, 中安清夫, 村上 晶, 藤木慶子, 横山利幸, 太田俊彦, 海老原伸行, 河野博之, 北川 均, 太田里佳, 高橋康造, 早津宏夫, 橘 信彦, 藤卷拓郎, Ha NT, 魯 文男, 舟木俊成, 渡部保男, 武田美佐子, 山口達夫, 上杉祐子, 糸井素純, 土屋 桜, 細田裕治, 矢島照紘, 飯田伸子, 武井 歩, 猪狩 淳, 山田俊幸, 末吉徳芳, 中村眞二, 古旗 淳, Thanh TK, Chau HM, Cung LX, 澤 充, 崎元 卓, 伏見典子, 三宅養三, 平野耕治, 堀田喜裕, 石田誠夫, 古川明博 (2002) 角膜疾患の病態と治療. 日眼会誌 106 (12) 757-777.

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 渡邊郁緒, 新美勝彦 (2003) イラスト眼科 第7版 文光堂 東京.
2. 佐藤美保, 鵜飼喜世子, 平井淑江 (2002) 両眼視機能検査 [久保田伸枝, 深井小久子編 眼科診療プラクティス 86. 眼科医と視能訓練士のためのスキルアップ46-57] 文光堂 東京.
3. 増田光司 (2002) 網膜光障害と照射条件. [本田孔士編 眼科診療プラクティス 84 眼の光障害 48-49] . 文光堂 東京.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 真島行彦, 谷原秀信, 堀田喜裕, 川瀬和秀 (2002) 緑内障における遺伝子診断 [沢口昭一他編 Glaucoma 21] ライフサイエンス出版 東京.

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

4 特許等の出願状況

	平成14年度
特許取得数 (出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成14年度
(1) 文部科学省科学研究費	3件 (420万円)
(2) 厚生労働科学研究費	2件 (350万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (万円)
(4) 財団助成金	0件 (万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (万円)
(6) 奨学寄附金その他(民間より)	8件 (410万円)

(1) 文部科学省科学研究費

- 堀田喜裕(分担者) 基盤研究(C)(2)「分子生物学的アプローチによるアッシュャー症候群の病態解明」(新規) 代表者 耳鼻咽喉科学教室 岩崎 聡
- 佐藤美保(代表者) 基盤研究(C)(2)「上斜筋麻痺の病態生理と治療方法に関する研究」270万円(新規)
- 中神哲司(代表者) 基盤研究(C)(2)「眼表面構成細胞におけるstem cell factorの発現とその制御」150万円(新規)

(2) 厚生労働科学研究費

- 堀田喜裕(分担者) 感覚器障害研究事業「高齢化に伴う失明疾患関連遺伝子多型とオーダーメイド医療への活用」150万円 代表者 慶應義塾大学助教授 真島行彦
- 佐藤美保(分担者) 感覚器障害研究事業「小児・若年者の難治性網膜疾患の原因と治療に関する研究」代表者 国立成育医療センター部長 東 範行 200万円

6 特定研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	1件	11件
(2) シンポジウム発表数	1件	5件
(3) 学会座長回数	1件	8件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	5件
(6) 一般演題発表数	4件	

(1) 国際会議等開催・参加:

2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演

Hotta Y, Gene therapy. The 12th World Congress of Retina International, Makuhari, Japan, August 4, 2002.

3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表

Sato M, Strabological findings after macular translocation surgery, Kyungpook-Hamamatsu Joint symposium, Hamamatsu, Japan, December 14, 2002.

4) 一般発表

ポスター発表

1. Ikeda M, Toyoda H, Okabe A, Sato K, Hotta Y, Fukuda A. Differential development profile of the cation Cl^- cotransporter expression and Cl^- homeostasis contribute to differential GABAergic actions in rat dorsal lateral geniculate nucleus and visual cortex, 32th annual meeting, society for neuroscience, November 2-7, 2002, Orlando, USA.
2. Tsuchiya Y, Kora Y, Fukuda S, Ito I, Nagayama A, The influence of corneal refraction for the accuracy of intraocular power calculation formula. European society of cataract and refractive surgeons winter refractive surgery meeting, February 7-9, 2003, Rome, Italy.
3. Kawano T, Hotta Y, Nishimura K, Kato M, Sato M. X-linked juvenile retinoschisis diagnosed by the DNA analysis, 29th annual meeting of the American association for pediatric ophthalmology and strabismus.
4. Sato M, Terasaki H, Amano E, Okamoto Y, Ikeda M, Extraocular muscle paths after large amount of torsional strabismus surgery, 29th annual meeting of the American association for pediatric ophthalmology and strabismus.

(2) 国内学会の開催・参加

1) 学会における特別講演・招待講演

堀田喜裕 (2002) やさしい眼の遺伝の話 秋田県眼科集談会, 4月, 秋田

堀田喜裕 (2002) 遺伝性眼疾患の基礎と臨床 ヒロシマフォーラム2002, 5月, 広島

堀田喜裕 (2002) 眼科領域における遺伝子診断と遺伝子治療の現状, 愛知眼科フォーラム, 9月, 名古屋

堀田喜裕 (2002) 網膜変性疾患の遺伝子診断と遺伝子治療, 山梨網膜研究会, 3月, 甲府

佐藤美保 (2002) 初診で見る眼位異常: 必要な検査と対処法, 8月, 静岡

佐藤美保 (2002) 屈折検査, 日本眼科学会専門医制度講習会, 9月, 盛岡

佐藤美保 (2002) 小児に対する屈折検査の現状, 屈折調節研究会, 9月, 盛岡

佐藤美保 (2002) 小児斜視の患者, 大人になったらどうなるか, 大阪市眼科研究会, 10月, 大阪

佐藤美保 (2002) 成人の斜視の診断と治療, 東海北陸眼科医会生涯教育, 2月, 名古屋

佐藤美保 (2002) 弱視治療の選択法, 眼科診療アップデートセミナー・2003, 3月, 京都

中神哲司 (2002) アレルギー性結膜疾患における肥満細胞とSCFの機能, 5月, 仙台

2) シンポジウム発表

堀田喜裕 (2002) 組織特異的遺伝子の機能と変異 日本先天異常学会, 7月, 浜松 シンポジウム

堀田喜裕, 堀口正之, 山本修士, 新井三樹, 坂本泰二 (2002) 遺伝性網膜疾患のトータルケア
日本臨床眼科学会, 9月, 盛岡 インストラクションコース

佐藤美保 (2002) 小児に対する処方, 眼鏡に関するシンポジウム, 9月, 浜松

佐藤美保 (2002) 内斜視 - 先天性内斜視観察研究の報告をうけて -, 斜視・最近の考え方と治療
方針, 9月, 盛岡

佐藤美保, 初川嘉一, 長谷部聡 (2002) 外斜視の話をしよう, 日本臨床眼科学会 9月, 盛岡イ
ンストラクションコース

3) 座長をした学会名

堀田喜裕 第56回日本臨床眼科学会
第68回日本中部眼科学会
第42回日本先天異常学会
第7回眼科分子生物研究会
第405回東海眼科学会
第38回日本眼光学学会第17回眼科ME学会合同学会
The 2nd Kyungpook-Hamamatsu Joint symposium

佐藤美保 第58回日本弱視斜視学会

邱 慧 第406回東海眼科学会

5) 役職についている学会名とその役割

堀田喜裕 日本眼科学会 評議員
堀田喜裕 日本神経眼科学会 評議員
堀田喜裕 静岡県アイバンク 理事
佐藤美保 日本小児眼科学会 理事
中神哲司 静岡県眼科医会 理事

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数 (レフリー数は除く)	0件	0件

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

堀田喜裕 Jpn J Ophthalmol (日本) 2回
Br J Ophthalmol (英国) 1回

佐藤美保 Jpn J Ophthalmol (日本) 7回
Invest Ophthalmol Vis Sci (米国) 2回

9 共同研究の実施状況

	平成14年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	3件
(3) 学内共同研究	2件

(2) 国内共同研究

三宅養三, 寺崎浩子, 中村 誠 (名古屋大学医学部眼科) 眼科領域の遺伝性疾患の遺伝子型と表現型の関連についての研究

真島行彦 (慶應義塾大学医学部眼科) 高齢化に伴う失明疾患関連遺伝子多型とオーダーメイド医療への活用 厚生労働科学研究費

東 範行 (国立成育医療センター眼科) 小児・若年者の難治性網膜疾患の原因と治療に関する研究 厚生労働科学研究費

(3) 学内共同研究

福田敦夫 (生理学第一) 大脳皮質視覚野の抑制性神経物質の研究

三浦直行 (生化学第二) 青錐体一色型色覚の分子遺伝学的研究

10 産学共同研究

	平成14年度
産学共同研究	0件

11 受 賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 眼科領域の遺伝性疾患の遺伝子型と表現型の関連についての研究

(目的) 眼科領域の遺伝性眼疾患について遺伝子異常と臨床像の関連を明らかにする。

(概要) 青錐体一色型色覚は、青しか判別できないたいへん珍しい疾患である。米国、欧州の症例ではその原因がプロモーター領域の欠失か、エクソン領域の点変異が原因であることが示されていた。われわれは我が国の唯一の報告例である1家系について検討した。各種のプライマーによる検討から、患者には赤緑遺伝子のプロモーター領域を含む約12Kbの欠失が認められることが示された。

(研究担当者) 堀田喜裕, 邱 慧, 小出健郎

2. 画像診断をもちいた斜視の診断方法の確立と治療方法に関する研究

(目的) 水平, 垂直, および回旋斜視にたいする診断と治療方法を改善する。

(概要) 360° 網膜切開中心窩移動術を受けた患者を対象に, 黄斑部が移動することによって発生する両眼視機能異常について検討した。黄斑部が移動することによって, 回旋複視および水平, 垂直複視が相乗的に増加すること, 回旋の程度が15° 以内であれば複視の出現が少ないことを報告した。

さらに、複視を自覚しない症例でも、水平偏位をプリズムで矯正すると複視を自覚する症例があることや、長期にわたり術後の屈折矯正がなされないでいると、小児においてみられる抑制に近い現象が起こることを観察した。また、代償機構は年齢が若いほど働き、高齢者になるほど代償できずに複視を訴えることを明らかにした。

外眼筋移動手術が眼球運動に与える影響については、新生血管黄斑症のために、360°網膜切開中心窩移動術を受けた症例を対象に検討した。術後複視を訴える患者を対象に上斜筋切腱術を含む2ないし4外眼筋の移動手術を行い、反対方向へ眼球回旋させた。術前・術後にMRIを撮影することによって眼筋の位置の変化を検討した。その結果、10°～35°の眼球回旋を起こす外眼筋移動手術をおこなったにも関わらず、眼筋の位置は眼球後方ではほとんど変化がみられず、眼球赤道面付近において位置の変化が見られるにすぎなかったことを報告した。これは眼窩内pulleyによって外眼筋の位置が堅固に固定されていることを証明する事象であり、pulley理論の裏付けとなる重要な知見である。

(研究担当者) 佐藤美保, 野寄清美

3. 眼表面構成細胞におけるstem cell factor (SCF) の発現とその制御

(目的) 増殖性変化を伴う眼表面疾患の病態解明のため眼表面構成細胞におけるSCF発現および影響する要因を検討する

(概要) ヒト角膜上皮株細胞, 結膜上皮株細胞、正常ヒト角膜上皮細胞, 正常ヒト結膜上皮細胞, 正常ヒトケラトサイト、正常ヒト結膜下線維芽細胞の培養系を確立した。またSCFのELISA系を確立し、より微量のSCFタンパク濃度が検出可能でかつ測定誤差の低い条件を検討した。上記の各細胞を培養後、各々の細胞において培養上清, 細胞溶解液のSCFタンパクの発現をELISA法により検討し、いずれの培養上清および細胞溶解液からもSCFタンパクの発現を確認した。また、各細胞よりmRNAを抽出し、RT-PCR法によりSCFmRNAの発現を検討した結果、上皮細胞では膜結合型SCFmRNAの発現が多く、線維芽細胞, ケラチノサイトでは主に可溶性SCFmRNAが発現していることを確認した。

(研究担当者) 中神哲司, 浅井竜彦

4. 大脳皮質視覚野, 外側膝状体の抑制性神経伝達物質応答の研究

(目的) 視覚系におけるCl⁻ホメオスタシスとGABA作用の発達的变化の解析

(概要) γ -アミノ酪酸 (GABA) は抑制性伝達物質としてなじみ深いですが、発達期には逆に興奮性に作用し、神経栄養因子として作用するとの報告がある。そこで、視覚系におけるGABA作用の発達的变化に関して調べるために、生後発達初期のラット皮質視覚野と外側膝状体を人工脳脊髄液下でスライス標本とし、GABAに対する神経細胞の反応をCa²⁺, Cl⁻光学的イメージング法により比較した。生後初期の皮質視覚野の神経細胞では、GABA投与により細胞外へのCl⁻の流出と、それに伴う著しい細胞内Ca²⁺濃度の上昇がみられ、GABAが興奮性に作用していることが明らかになった。また発達に伴ってこの興奮性の反応は消失した。外側膝状体の神経細胞では生後初期から興奮性の反応は認められず、両部位での生後発達過程のGABAに対する反応は明らかに異なっていた。この背景にCl⁻ホメオスタシスの発達に伴う変化があると考え、両部位でのCl⁻トランスポーター

の発現変化を調べた。生後初期の皮質視覚野ではCl⁻を細胞外へ汲み出すKCC2トランスポーターよりCl⁻を細胞内へ取り込むNKCC1トランスポーターが優位であり、発達に伴いこの関係は逆転した。外側膝状体では、発達初期からKCC2トランスポーターがより優位であることが判明した。これらの結果より、Cl⁻ホメオスタシスの発達的变化があり、これに伴うCl⁻の平衡電位の変化の過程が両部位で異なる可能性があると考えられた。また、神経細胞の発達の観点から考えると、この時期のラット皮質視覚野では神経細胞の遊走が見られ、その後外側膝状体からの繊維投射を受ける。しかし、この時期の外側膝状体では既に神経細胞の遊走、網膜からの繊維投射は終了しており、網膜からの活動依存性の繊維投射の脱落が生じている。よって神経細胞の遊走や、シナプス形成にはGABAは興奮性に作用し、その後のシナプス脱落期には抑制性に作用する可能性があることが判明した。

(研究担当者) 池田昌彦

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

大脳皮質視覚野と外側膝状体の神経細胞では、発達の過程でCl⁻トランスポーターを介したCl⁻ホメオスタシスの発達的な変化があることが明らかになった。更に、抑制性神経伝達物質であるγ-アミノ酪酸は、シナプス形成期にはこれらの神経細胞に対し興奮性に作用するが、その後の活動依存性のシナプス脱落期には抑制性に作用する可能性があることが判明した。

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

これまでの研究成果より、視覚系神経細胞の正常な発達に伴うCl⁻ホメオスタシスの変化についての興味深い知見を得ることができた。次に発達の過程に必須である、視覚入力を遮断した動物実験モデルを作成し、同様にCl⁻トランスポーターを介したCl⁻ホメオスタシスがいかに変化するかを正常発達と比較することで、弱視のメカニズムの解明につなげたい。

15 新聞、雑誌等による報道

1. 佐藤美保 (2002) 健康のページ 弱視斜視の眼帯、アイパッチ、静岡新聞、8月16日朝刊